

## ◆ 医学校について

「青柳文庫」は仙台藩の医学校構内に建てられました。仙台藩における医学教育は、宝暦10年(1760)、藩医である別所玄李(1722-1772)が医学講師に任命され、医書の講義を学問所で行ったのがはじまりです。学問所での講義では藩医のみならず家中医師や町医師にも聴講が許されていました。

その後、文化7年(1810)に養賢堂学頭に就任した大槻平泉により学制改革が行われ、医学教育部門は分離独立させることになり、文化14年(1817)百騎丁に医学校が完成しました。構内には施薬所を設け、治療を行うことにより学生の臨床実習の場としたほか、末無掃部丁(現在の仙台市青葉区花京院1丁目)には付属薬園である御薬園を設けて、施薬所での薬剤の原料となる薬用植物が栽培されました。

初代学頭に任じられた渡部道可(1772-1824)は、諸藩の医学校に先駆けて蘭方(オランダ医学)を採用し、佐々木中沢(1790-1846)・小関三栄(1787-1839)を講義に当たらせるなど、西洋医学の充実に努めました。しかし渡部道可の没後は再び漢方が主流となりオランダ医学教育は一時期衰退したため、希望する者は養賢堂の蘭学方で蘭学を学びました。



## 青柳文蔵の生い立ちと生涯

青柳文蔵は、仙台藩領磐井郡東山松川村(現在の岩手県一関市東山町松川)に、町医者小野寺三達の三男として宝暦11年(1761)に生まれました。兄2人姉3人の6人兄弟の末の子でした。父の三達は私塾も開いており、文蔵は幼いころから和漢の書に触れていたものと思われまふ。才気煥発で、12、3歳のころには平仄(漢詩の韻律についてのきまり)を暗記して漢詩を作ったといひます。

父の医業を継ぐため16歳で医師の門人となったものの、18歳で江戸に出ました。その際父から勘当を言い渡され、以後小野寺姓を捨てて父の旧姓である青柳を名乗りました。江戸に出たのち、文蔵は折衷学派の儒学者として名高い井上金峨(1732-1784)に学んでいます。

やがて文蔵は『棠陰比事』(宋代に書かれた判例集)など法令・法度の書物にひかれ研究を重ね、ついには公事師(金銭上のもめごとなどに介入して解決の仲介をする人)として名をあげるようになり、かたわら金融業を営むなどして財を成しました。文蔵の蔵書はこうして得た資財で買い集めたものでした。また当時の儒者や文人たちとの交友も多く、文蔵は天保10年(1839)、江戸でその生涯を終えました。



文蔵肖像



『棠陰比事物語』



「青柳倉記碑」(岩手県一関市立松川小学校)

## 現代に生きる「青柳文庫」の精神

現在、青柳文庫跡地(仙台市青葉区一番町、元仙台中央警察署敷地)の前に「青柳文庫跡地碑」が建っています。かつてこの地には、江戸後期の儒学者松崎儉堂(1771-1844)に青柳文蔵が撰文を依頼した「青柳文庫記」が刻まれた石碑が立っていました。その碑文によれば、「之(=文蔵の蔵書)を世の士子にして、吾少時の如く志を抱きて遂ぐる能わざる者に付して之を讀まむるに如かず」、つまり「自分の少年のころのように、学問への志を抱きながらも達成することができない人々に対して、自分の蔵書を利用して供して読ませるのがよい」との趣旨から文庫の設置を仙台藩に願ひ出たことが記されています。

また文蔵は、郷里の東山に初倉を設置して初4,000石を蓄え、この初を低利で貸し付けその利息をもって文庫の修理・賄いなどにあてるほか、困窮する人々の救済に利用する計画を立てています。さらに、蔵書が散逸しやすいものであることを述べ、「金沢文庫」や「足利学校」を例にあげ、仙台藩という「磐石の天府」に託すことができたからこそ、蔵書を後世に伝えられると記しています。青柳文庫のこうした精神は、現代の公共図書館の社会的使命と役割に通じているといひます。

その後「青柳文庫記」の碑は失われてしまいましたが、岩手県一関市東山町松川の松川小学校には初倉である「青柳倉」の由来を記した「青柳倉記」の碑が残されており、文蔵の志をしのぶことができます。



「青柳文庫記(拓本)」(松崎儉堂撰文)

## 『叡智の杜』レポート

## 『源氏物語絵巻』を身近に感じる授業

平成18年11月17日、県図書館が巡回貸出している複製資料を活用した古典の公開授業が宮城県築館高等学校で行われました。「古典の文法や解釈だけでなく、精巧な複製資料に触れることによって古典の雰囲気を生徒に味わってもらいたい」との思いから、同高校の上遠野裕子教諭が計画したものです。今回の授業では本来の巻子本の形が再現された国宝『源氏物語絵巻』の複製が利用されました。授業は、カーテンが引かれ薄暗くなった書道室で行われました。はじめに、繰り広げられた絵巻をろうそくの下で鑑賞することにより当時の人々が絵巻を見ていた環境を体感した後、照明の下900年後の現在の目で改めて絵巻を観察し、剥落の状況や細やかな筆づかいなどを確認しました。また、制作当時の絵巻の色彩を復元した『よみがえる源氏物語絵巻』(NHK出版)と比較し、当時使用された絵の具や、絵巻物特有の描写技法についての解説が行われ、当時と現代の美意識の共通点や相違点について生徒たちが考察しました。

授業を受けた生徒たちからは、「(複製は)絵の具が剥がれ落ちていてもとても味わい深い」「機会があれば本物をぜひ見てみたい」といった感想が寄せられました。



築館高校の授業